

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 6	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Alcohol and the preventive paradox: serious harms and drinking patterns. アルコールと予防パラドクス：飲酒パターンと有害事象	
執筆者	
Poikolainen K, Paljarvi T, Makela P.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Addiction. 2007 Apr;102(4):571-8.	
キーワード	
飲酒、入院、死亡率、予防管理	
要 旨	
<p>目的： アルコール問題の大多数が大量飲酒者からではなく適量・少量飲酒者から起こっているかも知れないという、逆説的な見解が成り立つかも知れない。この逆説は自主申告に基づいた調査・研究などから批判されてきた。今回の目的はこの逆説が死亡・入院を指標にして当てはまるか調べることである。</p> <p>方法： 1969年・1976年・1984年・1992年に15～69歳を対象としたフィンランドを代表する4つの調査が行われており、1969年・1976年・1984年の3回は6,726人分のアルコール関係の入院と死亡について調査しており、1984年・1992年の2回は5,558人分の自己申告式の調査をしている。前者のデータを2002年末までの入院・死亡登録とリンクさせた。男女別にそれぞれアルコール消費量の多い上位10パーセントの層と残りの90パーセントの層を比較、またアルコール中毒になった層とならなかった層を比較した。</p> <p>結果： 調査対象は自己記入式調査が男性3,025人・女性2,693人、入院・死亡の調査は男性2,945人・女性2,615人であった。男性ではアルコール消費の少ない90%の層が、自己申告式の問題の70%、アルコール関連の入院の70%、アルコールに関連する死亡の64%、アルコールの影響で65歳までに亡くなる短命者の64%をそれぞれ占めていた。女性はそれぞれ64%、60%、93%、98%であった。一回に5単位(アルコール60g)以上飲む者ではそれ以下の飲酒者より飲酒の害を受けやすいという結果であった。</p> <p>結論： 問題にされないような少量飲酒者から多く健康有害事象が出るという問題は男性ではアルコールに関連した入院と死亡、自己記入のアルコール問題について同程度に広く認められた。女性ではこの問題はアルコールに関連した死亡において他の有害事象と比べてより明らかであった。</p>	